

「日本近代の擬木づくりワークショップ 2020」実施概要と学生の感想

◆概要

大正期から昭和初期にかけて、公園や庭園にはセメントモルタルで精緻に造形した擬木が開発・利用された。特に東京では上野動物園、有栖川宮記念公園、大塚公園などにその実例が残っています。その立役者は井下清からも大変信頼されていた左官師・松村重でした。ただし、時代の流れに従って、擬木はプラ擬木が多く使われるようになり、ハンドメイドの擬木の技術が失われようとしています。このワークショップは、松村重の末裔にあたる松村守様のご厚意により、今後の手作りの擬木の技術継承のため、セメントモルタルで精緻な擬木づくりを体験し、セメントモルタルの材料特性を学ぶとともに、モノづくりの面白さを感じ、造形手法を会得する目的をもって実施しました。

◆ワークショップの進行等について

10月28日：ガイダンス（zoom）：ワークショップ目的と進め方、日本近代の擬木の歴史紹介。

参考資料の確認。13：30より実施

開催日程：A日程）11月7日・8日（土・日）市川・芳田・吉田（以上3年）・小山（4年）・呉（大学院修士1年）・張（造園科学科助教）・栗野（同准教授）、以上7名
B日程）11月28日・29日（土・日）石川・齋藤・富井・原・坂田（以上3年）・栗野（造園科学科准教授）、以上6名

◆開催場所

- 株式会社富士植木多摩支店（東京都多摩市貝取1-1-5）
小島和夫様に大変お世話になりました。



- ワーキング時間 8：45～13：30 頃（2日間とも）

職人技に魅せられた2日間

41518014 市川 天音

2020年11月7日・8日に、研究室活動の一環として擬木づくりのワークショップに参加させていただきました。私は、今回の活動に参加するまで擬木のことを考えたことはおろか、作り方や材料のイメージすらできていませんでした。しかし、活動に参加するにあたり擬木や擬石に関する論文を読み、昭和初期から続いてきた技術であることを知ると、その技術に感心し、ますます興味が湧きました。研究室活動の中でも楽しみにしていた擬木づくりでしたが、セメント自体が身近なものではなかった私は、活動当日まで不安もありました。

当日は期待と不安を抱きつつも、作業が始まると私は夢中で職人さんたちの仕事の様子を眺めていました。普段見慣れない道具や材料を駆使して擬木を作り上げていく工程はとても興味深く、セメントは塗るだけでなく乾かす時間も十分に取り必要があるなど、様々な過程を経て丁寧に作られていることを実感できました。また、着色剤に関しては量が少し変わるだけでセメントの色が変化し、さらに水分量とのバランスも考えなくてはいけないため、非常に難しい技術であると改めて感じました。さらにその日の天候、気温や湿度によって状態が変わるといった性質や特徴を理解し、体で覚えている職人さんたちはたくさんの経験を積んでこられたのであろうということがわかりました。

私たちも実際にはけを持たせてもらいセメントを塗っていくと、途中から乾き始めてしまい、均一に塗る難しさを実感しました。また特に難しかったのは、木に苔むした雰囲気を作り出すための黄土色と緑色のセメントをはけでふりかける作業です。はけをうまくコントロールできず、わざとらしさやムラが出てしまって、職人さんがさりげなくこなしている作業のすごさを知ることができました。また、樹皮の様子を表現するために線を入れていく作業では人によって個性が出ていたので、色々な表現ができることを学びました。

今回擬木づくりの活動に参加して、実物の樹木もちろん良いですが、擬木のような「人の手でつくられたもの」の良さや温かみを実感することができました。職人さんの誇りと想いが込められた擬木づくりの技術を目の当たりにすることができて良かったです。

また活動を終えて、普段何気なく歩いている道にも擬木が使われていることに気付くようになり、今回新たな経験ができたことで勉強になりました。貴重な技術を教えてもらえたことに感謝して、これをきっかけに他の造園施設材料にも興味を持つなど、自分の糧としていきたいと思います。

最後に、今回の擬木づくりの活動の機会を下さり、当日は早朝から準備して下さった松村創芸の松村さん、富士植木の小島さんへの感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。この度は私たちのためにご協力いただき、誠にありがとうございました。

擬木づくりを体験して

4 1 5 1 8 0 0 9 石 川 優 輝

擬木づくりでは大変お世話になりました。この2日間の体験は私にとって、とても有意義な時間となりました。

擬木づくりを体験して感じたことは、擬木の美しさです。私は擬木づくりを実際に体験するまでは、本物の木には及ばないところがあるのではないかと考えていました。しかし、この擬木づくりを体験してみて、色を何層にも重ねて完成する擬木には、どこか芸術性を感じずにはいられないものがあることが良く分かりました。サクラやシラカバの擬木は色合いがとても綺麗だったため、今も完成した擬木がどのようなになったのか楽しみにしております。

擬木づくりを体験して学んだことは、感性を鍛えることが重要だと学びました。擬木づくりでは、色を2色使い、それを自分の好きなように擬木に塗る作業がありました。この際、2色のバランスが悪かったり、ペンキを飛ばす場所が良くなかったりすると、完成した際の見目の美しさに影響が出るのが分かりました。作った人によって完成したものが変わるの面白いですが、より良いものにするためには、自分の感性をもっと研ぎ澄まし、審美眼を鍛える必要があることを学びました。

擬木づくりを体験して驚いたことは、完成度の高いものは、本物の木と見分けがつかないということでした。実際に擬木を作っているところを見学させていただいて、こんなにも本物の樹木のようにできるのかと感銘を受けました。また、これほどのものを作る技術を持つ職人の方々や、伝えられてきた技術に感動しました。今まで自分が見てきたものにも、本物の木だと思っていたものが擬木であったのかもしれないと考えると、本当に素晴らしい技術だなと思いました。今後は自分でも擬木か本物の木であるか見極められるようになれたらいいなと思いました。

私は擬木づくりを通して、審美眼をもっと鍛えていきたいと思いました。擬木づくりで体験した、色を調節して混ぜることによって出来上がるオリジナルの擬木にはとても感動しました。このような美しいものをこれからたくさん見ることで、自分の感性を豊かにしていきたいと思いました。

今回の擬木づくりがとてもスムーズに行うことができ、無事に擬木を完成させることができたのは、講師の村松さん、会場の準備をしてくださった小島さんをはじめとした皆様のお陰でございます。擬木づくりの技術を丁寧に教えてくださったり、すぐに擬木づくりが始められるように環境を整えてくださり、本当にありがとうございました。とても貴重な体験となりました。この2日間の体験を忘れずに、今後の生活を送っていききたいと思いました。末筆ではございますが、皆様の一層のご清栄をお祈り申し上げます。

擬木づくり 参加させていただいて

4 1 5 1 8 0 5 0 坂 田 瑠 美

先日は擬木づくりという貴重な機会を開いてくださりありがとうございました。
私は 28.29 日に参加させていただく予定でしたが、ぎっくり腰になってしまい 28 日のみの参加になってしまいました。

ご迷惑をおかけし大変申し訳ありませんでした。

1 日目のみの参加でしたが、とても楽しく学ばせていただくことができました。

「擬木づくり」を教えてくださいと聞き、どのような材料や道具を使い作り上げていくのか、あの木の質感をどのように表現するのか、どのくらいの制作期間であるのか…
様々な疑問、予想、そしてずっとワクワクしっぱなしの時間でした。

今回学ばせていただいた擬木づくりを今後自らも発信できるくらい、もっと調べたり、自ら制作したり、と取り組んでいきたいと思いました。

コテを買い、代わりになりそうな道具や材料を使い 1 回家で制作に挑戦しましたが、モルタルの配分を間違えてしまいベチャベチャになってしまったり、とかなり難しく失敗してしまいました。

なかなか松村さんのようにはいかないです。

伝統を引き継ぎ、綺麗に作り上げる松村さんの技量はやはりとても素晴らしく、尊敬しました。

真似ごとですが、できるまで家でも制作に挑戦してみようと思います。

講師の松村守さん、そして会場準備をしてくださった小島和夫さん、本当にありがとうございました。

末筆ではございますが貴社のご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

擬木作り体験からの学びや感想

41518048 齋藤 啓太

松村さん、今回、伝統的であり歴史が深い、擬木作りというものに参加させて頂き、そして擬木の事について、様々なご説明やご指導して頂きありがとうございます。また、富士植木さんにおかれましては、自分達の擬木作り体験の為に、場所の用意や様々な準備をして頂きありがとうございました。

今回、初めて擬木という物、そして作成の工程を見させて頂きました。擬木は、よくある簡易的な物ではなく、しっかりと重さがあり、更に近くで見ても本物の木と相違なく感じられ、驚きました。また作成工程では、最初にセメントモルタルを塗りつけていく所から見学させて頂きましたが、塗り方もただ単調に塗っていくのではなく、モデルとなる木の樹皮や枝の付き方等を意識していき、更にそれを何層にも塗り込んでいく姿を見ていて、慣れもあるのかもしれませんが、コテを少し使わせて頂き塗らせて頂いた経験を踏まえて、これは熟練の技術が必要になってくる物だなと感じました。そして色を塗る際も、とても難しく技術が必要だなと感じました。それは、色を塗る際に、バケツに用意して頂いた色をハケに付けて、手のスナップを使い、色を飛ばして上手く塗りつけるのが難しく、個人的に擦り付ける様に色を付けてしまったり、色を付ける量を間違えてしまい、とてもムラが出てしまったからです。また、年輪や樹皮を書く際にも、技術が必要だなと感じました。ただ線を入れるだけでは、傷跡のようになってしまうので、釘のハラを使う事により、樹木の種皮っぽさが出やすくなる事を知ったからです。

そして、より熟練の技を感じられたのが、富士植木さんの看板と思われる物を擬木で作っていた時です。自分達に作って頂いた形態とは違い、木の板の形をしていて、擬木の形状も様々な形にする事が可能なんだなと驚きましたし、なにより、木の板の木目をコテを使って繊細に表現なさっていて、本当に美しいなと感激しました。

今回、擬木作り体験前に擬木や擬石が、様々な所で利用されている事を事前に先生から教わっていて、更に身近な所にも存在していて、失礼かもしれませんが見慣れている物ばかりだと思っていました。しかし、そんな事はなく、冒頭の方でも記載させて頂きましたが、樹種、樹皮、木口、年輪、木目、色等本当に細かく再現、表現をなさっており感動しましたし、これが本物の擬木なんだなと、しっかりと認識する事が出来ました。また、もう一度作る際は、もっと細かく作ってみたいと思いました。改めまして、松村さん、富士植木さん、様々な事を教えて頂き、そしてお世話になり、ありがとうございました。また、機会がございましたら何卒よろしく願い致します。

擬木づくりを体験して

4 1 5 1 8 0 7 5 富井 大樹

擬木づくりワークショップを終えた今、二日間という短い時間の中で得たものはとても大きかったと感じています。思い返せば今回の体験は「初めて」の連続でした。初めて生で見る「職人」の存在、初めて間近で見る造園の仕事が行われる「現場」、その中でも「擬木」という未知のモノが生み出される環境、といった具合に目に映るものすべてが新鮮でした。また「セメント・水・砂利の配合によってモルタルは出来る」と授業で聞いていたものの、実際に作られるところや現物をみたときには、自分の中に「これが本物のモルタルか」「こんな風に手際よく作られるものなのか」と小さな感動も生まれました。

そのような初心者丸出しの私の心中をよそに、職人の方たちは非常にテンポよく作業を進めていかれました。コテを使ってドロドロで扱いにくそうなモルタルを器用に塗りつけていくさまは、まさに「職人の仕事」そのものでした。そして、その技術の正確さや、一つの作品に対し二人の職人が黙々と作業する風景、彼らの息の合いようは見事としか言いようがなく、ただただ見とれるばかりでありました。

多くの発見があった中で、何よりも印象に残っているのは、松村さんがまっさらなモルタルの表面に、小さなコテ一つで、木目を刻み込んでいく光景です。灰色のモルタルが一瞬にして何年も生きてきた古木の凄みをもつようになるのを、間近で目撃したときは、どれだけ凝視しても自分の目をしばらく信じることは出来ませんでした。コテの角度、力の入れ具合、経験など、すべてをバランスよく合わせもった人間にしか為しえない業なのでしょうが、無機質の代名詞であるようなモルタルが、有機的な木目とともに息を吹き返すさまは、生命創造の瞬間に立ち会ったような気がして、なんとも言えない感覚がありました。

もちろん、感心したのは職人の皆さんの仕事ぶりだけではありませんでした。ある程度の下地は用意していただいたものの、実際に自分の手で樹皮を表現し、筆で着色し、ニスを塗りこむ、という作業を行うことで、自分の手で何かを生み出すことの楽しさを久しぶりに実感したと同時に、擬木という代物の奥深さや愛くるしさに気づくことができました。

わざわざ労力をかけて「木を擬した」ものを作るということを、何も知らない人は意味のないことのように考えるかもしれません。しかし、実際に体験してみて感じたのは、「擬木は本物の木よりも本物に近い」ということです。木という自然物を、人間の手で一から創り出すという行為は、神への挑戦のようで、技を磨くことによってその領域は至高へ近づいていくのではないかと感じました。つまり、「本物か、偽物か」といった二元論では片づけられない世界を「擬木」は内包しており、「職人」という圧倒的な存在がそこへ説得力を加えているように感じました。このように、今回は職人の世界を垣間見させていただいたわけですが、新たな発見も多く、実りある時間を過ごすことができました。この場を用意してくださった小島さん、ご指導いただいた松村さんには、感謝してもしきれません。本当にありがとうございました。

擬木に触れさせていただいて…

4 1 5 1 8 0 9 6 原 智 輝

今回は擬木の製作過程の見学及び実際に体験させていただく貴重な機会を設けてくださり本当にありがとうございます。

普段、公園や庭園に訪れる際にまるで本物の木のようにはあるが触れてみるとまったくもって木ではないものがあるとは思っていました。それが今回のワークショップの過程で正体がわかりました。今回の体験で製作したものは大きくても手で抱えられるほどのものでしたが、見せていただいた灯籠や上野の猿山など、より大きいものがあると聞いて驚きました。今回のサイズでも3日ほど完成までかかるのにあの大きさになるといったいどれほどの機関と労力を費やしたのだろうと考えてしまいます。ペットボトルにラスを巻きつけその上からモルタルを塗り、模様をつけるという過程自体はものすごく複雑なものではないかもしれませんが、その中にも技術が光っていると感じました。モルタルを塗り付ける時から完成形を想像することは容易ではないですし、完成形をイメージするには植物についても詳しくなくてはいけないので様々なことに精通していなくては出来ないことであると感じます。

実際に体験させていただいて、我々のような素人でもそれらしいものは作れますが本物により近いものはそう簡単に作れるものではない、と実感しました。木口を平らにならすのもどれくらい塗り付けてどれくらいコテで伸ばせばいいか中々分からず厚塗りになってしまい松村さんに削っていただいたときは申し訳ない気持ちでした。色を付けるのも木の雰囲気を出しオレンジと緑で再現できるのかと思ってしまいましたが塗り付けて箒で伸ばした時に一気に雰囲気が出たなと感じました。釘で樹皮を再現する際にはできるだけ見本を再現し用としたのですがうまくいかず、技術の高さを体感しました。ここまでの一連の流れも精一杯松村さんの製作されたものを参考に作ったつもりでしたが遠く及ばず、一朝一夕でできるものではなく長い時間をかけて培ってきたものなのだと良く感じました。その後に富士植木さんの看板の裏の板に木目をつけている作業を見学させていただいたときにあまりにもすごすぎて自分では一生かかってもこのレベルには到達できないのではないかと感じてしまいました。

今回は非常に貴重な体験をさせていただきありがとうございます。公園や庭園のパーツにも多くの時間や歴史、技術が詰まっていることも感じました。今回の機会を設けてくださった松村様、場所を提供してくださった富士植木様、小島様、この度はありがとうございました。

擬木づくりで感じたこと

4 1 5 1 8 1 3 2 芳 田 雅 睦

松村さん今回このような貴重な体験と経験をありがとうございました。富士植木さん今回このような機会とこのような時間と場所を用意していただきありがとうございました。私は 11 月 7.8 日、前半の回に参加させてもらいました。私は擬木の存在や出来上がりは知っていましたが、内部構造や材料モルタルの水分量等知らなかったことばかりです。材料がモルタル、細骨材、砂、水と、コンクリートでいうと、仕上げのような内容でした。水を混ぜる時もバケツや計量カップを使わず、バケツにブラシを浸しブラシを振るという少量を作るのに適した技法でした。初めて見た技法でした。左官工事の経験はありましたが、少量だけ作ることはなかったので、驚きと感心に浸りました。そのモルタルも左官とは違い水分量も半分ぐらいで、少し硬いモルタルで仕上げていました。樹木の樹皮を表すのに水分少な目で粗い方がいいのだと感じました。基部、今回は水を入れたペットボトルで代用していました。擬木を作る際金物の網を使うそうですね。もし、独り立ちしてから擬木を使うことがあれば、この経験を糧にしたいと思います。擬木のペイントには、カラーモルタルに白モルタルと、モルタルを混ぜるそうで、水分量はオノマトペでいうとドロドロよりはサラサラでいて色を塗るというよりは被せるという方が的を射ているようでした。1 日目はクヌギをイメージしていたとかでベースの茶色は刷毛でベターっと塗り、苔や樹液、テカリを表す黄や緑を刷毛で水分、インクを飛ばした後に擬木に対し飛ばしかけていました。黄や緑は少量でいいためでした。2 日目はベースが白のシラカバと少し黄みのある茶色の桜を作りました。2 日目は飛ばさず、ラインを刷毛でつけました。この木々たちは苔や傷が樹皮の割れ目に現れると樹木の特徴をとらえた技法が見られました。その日の最後は傷、年輪と樹皮の傷をつけるので終わりました。1 日目は縦に傷をつけました。クヌギの樹皮の割れ目が建てであるためでした。逆に 2 日目は、傷はほぼつけませんでした刷毛で横に横に撫でるように付けました。ここでの注意点が 2 つ。1 つが枝分かかれされたような個所はその流れを無視せずやること。1 つは傷の間隔はテキトーであって適当でないこと。この 2 つを注意して施工すると、樹木を表現できました。今回な体験はこのような作業でおわりました。松村さんから頂いた今回のような貴重な体験はこれから就職してからでも得られないものだと思います。本当にありがとうございました。

擬木づくりから学んだこと

4 1 5 1 8 1 3 3 吉田 雄哉

11月7・8日の前半でお世話になりました。東京農業大学3年の吉田雄哉と申します。今回は、擬木づくりと言うめったに出来るものでは無い貴重な体験をさせていただき、まことにありがとうございました。

擬木づくりにおいて私が学んだことは、擬木をつくるうえで欠かせない材料や塗料の扱い方、また、実際に擬木づくりの一部を体験することで、一見すると単純作業にも見えなくはない、塗り方や彫り方の変さが身に染みてわかるという事で、とても貴重な体験でした。特にこの中でも、擬木に対する緑や赤、黄色などの塗料の塗り方に関しては、外見よりも圧倒的に繊細な動作が求められるものであり、講師のお二方のように均等にまばらな模様が描けず、塗料が1点に集中したり、量が足りてなく、意味もなく筆を振っているだけだったり、狙いが外れてブルーシートにかかってしまい、塗料が無駄になってしまったりと加減が非常に難しく、今回の体験で塗り方の基礎を頭の中に入れることは出来ましたが、慣れることは出来ず、お二方の技術に感服いたしました。しかしながら、難しいと言う感想を抱いたとはいえ、擬木づくりは、今まで体験したこともなく、当日まで何をやるのかもわからなかったことなので、とても興味深く、また、自分で擬木を作り上げるワークショップの工程は非常に面白く、そして、楽しいものでした。出来上がった作品はまだ見ていないのですが、どの様な仕上がりになっているか、とても楽しみです。

他にも、擬木づくりを通して知った材料（セメントなど）の知識も非常に興味深いお話で、中でも、擬木の課題点である白化現象と高速道路などにおける液化して垂れてしまう現象が材質的な理由で同じだと知った時は、身近にある現象で擬木が白化してしまう事がいかに良くないことかが想像でき、とてもわかりやすかったです。また、意外だったのが、材料の一つにガラス製の繊維が使われていたという事で、見た目からは想像できない擬木の材料について知る事が出来て、非常に面白かったです。さらに、意外に思ったのが、塗料の塗り方で、実際に塗り方を見る前までは、所謂、ベタ塗りを何層にも重ねて塗るものだと思っていたのですが、そうではなく、まばらに美しく散らせた塗料を幾重にも重ねると言う手法がとられているのを拝見し、完成品は勿論の事、色が付く過程まで美しいものであったことに大変、驚きました。

最後に繰り返しになりますが、先日は、擬木づくりと言う大変貴重な体験させていただきましたこと、お二方には心より感謝申し上げます。ありがとうございました。また、今回は大変お忙しい中、場所や機材等を貸してくださいました富士植木様には、厚く御礼申し上げます。皆様、本当にありがとうございました。

日本の伝統技術としての擬木

4 1 5 1 6 0 5 7 小山 拓朗

初めに、講師の松村守さん並びに松村創芸さん、会場準備を行っていただいた小島和夫さん（富士植木）今回の擬木づくりワークショップの開催をしていただき、ありがとうございます。松村さんからは、他では学べない日本の擬木づくりを教えていただき感謝致します。この技術の伝統者が少なくなっている事から、若者に伝承すると思いから今回のワークショップを開催していただいた事は大変ありがたいもので、大変良い経験となりました。会場は、富士植木多摩支店でしたが、小島さんも松村さんと同じ思いかと思いますが、お忙しい中会場の準備を行っていただき感謝致します。大変良い環境で擬木の技術を学ぶことができました。

擬木の制作過程を見学・体験させていただき、唯一無二の技術だと感じました。日本の動物園や公園、庭園などの造園空間で何気なく見ていた擬木の技術は、全てモルタルで造形から着色を行う事と知りました。現在ではテーマパークや商業施設で擬岩や擬木を使用している事がありますが、これらは海外からの技術である事を再確認しました。擬木で使用する染料や道具は門外不出の事ではあったと思いますが、丁寧に説明していただき良い学びとなりました。染料の調合は、経験と感覚が必要である事の説明を受け、数値では表せないものだと思います。また、造形や調合の際に本物の樹木の幹肌や色をイメージして、時には実際に見ながら調合している姿から、日常で樹木の色や特徴を捉えておく必要性を感じました。造園業界に生きる者として樹木の特徴や色をよく知っておく必要があり、それを表現する事の重要性も感じました。

擬木が乾燥するまでの時間で、現在は染料やひび割れ防止剤、トップコートの入手が難しくなっており、様々な材料を試して適合する材料を探求していた話や他の擬木製作者との違いの話、これからの擬木の展開方法の話、海外の技術との違いの話などを伺いました。これらの話から、今後の技術存続の方法や展開を検討していく必要があると感じました。新参者ではありませんが私たち若者も一緒に検討ができればと思います。海外の軽量モルタルを使用する技術に日本の擬木技術は押されている現状ではありますが、強度や耐久性は劣っていないと思いますので様々な展開ができると感じています。日本で生まれたこの技術を、日本で生まれ育った若者の私たちが伝承し展開していくことができれば幸いです。また、昔に制作された擬木が崩れている現状もありますので、部分的修復の際にはこの技術が必要になります。その修復方法も考えていく必要もあると感じ、若者の使命だと思います。

擬木づくり体験感想

4 5 7 2 0 0 0 3 吳 京樺

今回は松村守（松村創芸）さんが擬木作りの講師をして頂き、小島和夫さん（富士植木）の会場準備していただき、ありがとうございました。私は台湾からの留学生で、いまは東京農業大学の博士前期の庭園文化研究室で日本の造園を学んでいます。日本近代の擬木作り方を見るのは初めてです。私の記憶の中に、台湾の公園にある擬木はプラの擬木が多かったです。そして日本でも、沢山の場所はプラ擬木が使用されています。ハンドメイドの擬木の技術が失われようとしている。また、昔の擬木擬石を如何に補修、修復していくかは必ずハンドメイドの擬木作り技術が必要だと思います。今回、セメントモルタルで精緻な擬木づくりを体験出来て、本当に貴重な経験だと思います。

ワークショップの最初、松村守さんがセメントで木の造形をしている時、木のモデルや写真が無くても、ただ記憶と経験で敏速に木の形を作りました、そして翌日の白樫も同じく、樹のモデルを見る必要がなくて、すぐ出来ました。これは必ず大量の練習が無ければ絶対出来ないと思えました。頭の中に浮かんだ質問は、松村守さんはどれくらいの樹木種類が出来ますか、どの樹種が一番擬木として使われているかという質問を聞きたかったのですが、その時はセメントプラスターの着色に夢中していて、聞くのを忘れました。着色の時も、簡単に見えそうけど、実際自分でやる時は難しかったです。セメントプラスターの着色には茶色、黄色、緑、赤の使い型が各自あり、樹幹の色は茶色と黄色、年輪は黄色と赤、苔は緑、全てを塗った後、彫刻カービングツールで樹幹の模様書いた後はもうすでに本物の木に見えます。最初は黄色と少なめの緑でブラッシュを振り回しの水玉模様にもびっくりしました、まだ、彫刻カービングツールした後、もう樹幹と似ていると思いました。そして、二日目の乾いたセメントモルタルは、樹皮は浅いグレー色になり、更に本物の木に似ています。

このワークショップ体験、私が思った一番難しいことは、年輪を描く事です。自然の年輪は特有な色、形、と割れ型がありますが、私が描いた年輪は綺麗な丸を描くのを中心に、自然に見えない割れ方になりました。本当に難しいです。このワークショップ体験から学んだ事は、擬木の作り方だけではなく、セメントモルタル擬木は本当に大量の経験と直感が必要です。セメントプラスターの着色の混色比率、木の造形とかはすべてはレシピ無く、感覚と経験の重ねから作りました。今回の体験は擬木づくりの大変さ、作り方を色々学びました、本当にありがとうございました。